

2019-2024

鹿児島離島文化経済圏 インパクトレポート

IMPACT
REPORT

ようこそ、新たな島へ。

2019年、そんな言葉から始まった鹿児島離島文化経済圏。温帯から亜熱帯に渡る、南北600キロに広がる鹿児島県下28の有人島のつながりを創出する挑戦と共感の小さな共同体。そこには、およそ15万人が暮らしており、豊かな自然環境を礎に、地域固有の生活文化や島の集落コミュニティなど、多様な文化資本や社会関係資本に溢れています。

一方で、右肩下がりと呼ばれる人口減少社会において、少子高齢化などをはじめとする社会課題も顕著です。海に囲まれた地理的な状況からも孤立しやすく、島嶼地域ならではの課題と常に隣り合わせ。将来の日本の縮図とも言われる島々は、まさしく課題先進地であり、日本の未来の鍵を握っています。

海という存在は、 島と島を隔てるものではなく 繋いでいるものだー

私たちは、課題に対する見方を変えて、繋がりの中で頼り合える社会をつくり、地域課題を可能性という希望に変えていく。そんな挑戦が生まれる海域を共に作ってけると信じています。

鹿児島離島文化経済圏 発起人
(東シナ海の小さな島ブランド株式会社)

山下 賢太



1985年、鹿児島県上甕島生まれ。JRA 日本中央競馬会競馬学校を中退後、16歳で無職。きびなご漁船の乗組員を経て、京都造形芸術大学環境デザイン学科卒。FISHERMANS FESTや鹿児島離島文化経済圏等を監修。「暮らしの風景を耕す」をミッションに、小さな生業の再生と農林水産物の生産から食卓まで一貫したデザイン経営とあらゆる地域資源が循環する新時代の村づくりを実践。
国土交通大臣賞'25、内閣総理大臣賞'23受賞。

RITOLAB

鹿児島離島文化経済圏

HISTORY

船出から現在までの取り組み

2019

TOPIC 7月

鹿児島離島文化経済圏発足



EVENT 7.31

リトラボ セイルミーティング in mark MEIZAN

95名の賛同者が、鹿児島市に集結しました。現在の離島にどのような課題があるのか。また、今後どのような挑戦や連携が必要かについて意見交換を実施。

基調講師 事例発表

株式会社umari プロジェクトデザイナー 古田 秘馬氏
[奄美大島] はなはなエール 泰山 祐一氏
[十島村] 一般社団法人宝島 [三島村] NPO法人みしまです

FW 9月

フィールドワーク in 種子島

種子島産のお茶を活用したクラフトビール、南蛮焼や刀鍛冶の技術を活用した空き家再生の取り組みなどの地域内連携に挑戦した。



FW 10月

フィールドワーク in 三島村 硫黄島

大名筍の新たな観光利用や自然環境を生かした島暮らしそのものに注目したアクティビティの創出。硫黄島・黒島・竹島の有志で連携して挑戦した。



2020

EVENT 10.6 - 12.1

RITLAB ONLINE SCHOOL 開港(講)

地域づくりや商品開発に対するデザイン思考獲得のためのオンラインの学びの場づくり

第一回講師 株式会社四万十ドラマ 畦地 麗正氏 01	第三回講師 株式会社下園薩男商店 下園 正博氏 03
第二回講師 株式会社umari 古田 秘馬氏 02	第四回講師 株式会社版尾醸造 版尾 彰浩氏 04
	第五回講師 森果樹園×ツギキ 森 知宏氏 05



2021

FW 1月

リトラボ オンライン
フィールドワーク in 屋久島

世界遺産登録からまもなく30周年。変化していく第一次産業や観光産業。文化が失われていく危機感から可能性に向き合う挑戦が始まった。



FW 2月

リトラボ オンラインフィールドワーク in 獅子島

鹿児島県最北の離島、獅子島。観光交流拠点の建設をきっかけにして、第一次産業の未来を変える地域商社への挑戦がスタートした。

RITOLAB (リトラボ) とは?

令和元年7月31日、新しい時代のはじまりに鹿児島離島の人々と地域をつないで、新たな価値を創造する実践型コミュニティ「鹿児島離島文化経済圏 通称=リトラボ」が旗上げされました。温帯から亜熱帯に渡る南北600kmに広がる鹿児島県下28の有人離島。それぞれの異なるテーマを持って取り組む離島地域のプレイヤーと、民間と行政の垣根を超えたパートナーとともに、鹿児島離島に新たな価値とプロジェクトを生み出していく創造的なコミュニティとして船出しました。

PROJECT 7月 上甕島と下甕島の連携商品の開発

株式会社ヒラミネのアロエ、青瀬地区コミュニティ協議会の橙果汁、こしきの塩、東シナ海の小さな島ブランド株式会社の原材料の連携により、新商品開発を行い、柑橘系フルーツシロップ「KINOS/KITRUS」を発売開始。



EVENT 7.14 リトラボ セイルミーティング

60名の賛同者が、鹿児島市markMEIZANに集結。離島の課題共有とあわせて福井県鯖江市・越前市・越前町で広域開催するものづくりの祭典「RENEW」のディレクター新山直広氏を基調講師に迎え、持続可能で創造的な産地づくりについて学んだ。



基調講師
「未来につながるものづくり」
合同会社TSUGI 新山 直広氏
事例発表
[屋久島] アイランドコーポレーション株式会社
[中之島] 中之島農業生産組合
[上甕島] 株式会社ヒラミネ

PROJECT DESIGN TUG

鹿児島県内の若手クリエイターと地域それぞれの課題解決を支援する伴走型のマッチングプロジェクトを実施。ヒアリング、課題整理、事業計画、マーケティング、商品開発、ブランディングなど、あらゆる側面から挑戦を支援した。

講師
株式会社カヤック
Living 元代表取締役
土屋 有氏

屋久島

「とびっきり、飛び飯。」



中之島

「mon・de・banana」



2022

EVENT 3.4 - 3.6

鹿児島離島の見本市
「&island」初開催 in マルヤガーデンズ

来場者1,000名を記録



TOPIC 3.9

「SANROKU Inc.」創業

屋久島の食と流通を面白くするリトラボパートナー3社による合弁会社「SANROKU Inc.」を創業。屋久島印のトビーニャカウダ製造・販売開始。



EVENT 4.22 - 4.24

「薩摩会議」へ初出展

NPO法人薩摩リーダーシップフォーラムSELFが主催する「薩摩会議」in鹿児島市において、鹿児島離島文化経済圏として離島の物販・交流ブースを初出展。



TOPIC 7月

リトラボパートナー
+リトラボサポーターズの登録

鹿児島離島文化経済圏のコミュニティ創出のための取り組み。



リトラボ会員

224名

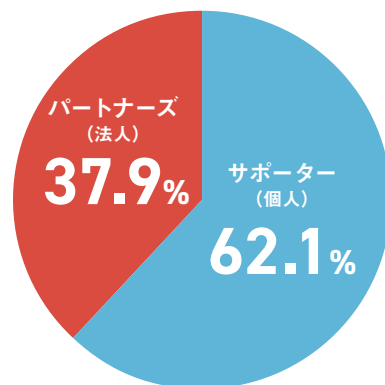
パートナーズ (法人)

85社

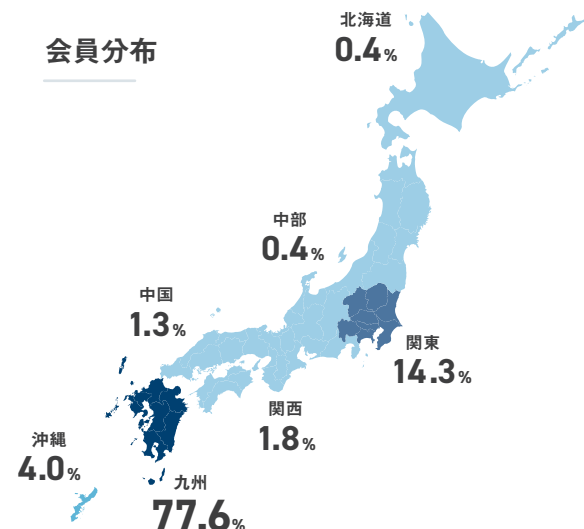
サポーター (個人)

139名

会員比率



会員分布



RADIO 7.19

しまの暮らしを覗き見るオンライントークラジオ

「RITOLAB LIFE STORY」配信スタート



EVENT 9.12

リトラボカレッジ開港式
in 鹿児島県庁18F

基調講師

島おこしの先駆者から学ぶ
島々の地域づくり

「課題を価値に変える」

有限会社アーマイナープロジェクト

NPO 法人ディ代表理事 麓 憲吾 氏



参加者数: 約45名

事例発表

【中之島】中之島農業生産組合

【上飯島・下飯島】一般社団法人飯島社中

EVENT 7.14 U-35 RITOLAB NEXT in 飯島

概ね35歳以下の次世代の離島人材を育成するためのフィールドワーク及び研修プログラムを1泊2日で、飯島にて開催しました。また、アドバイザーとして奄美大島にてあまみエフエムやライブハウス ASIVIなどを運営するアーマイナープロジェクトの代表であり、放送局長である麓 憲吾氏もお迎えした。

開催日時: 9月12日・13日1泊2日

開催地: 飯島列島

事例発表: 島守株式会社、こしきツアーズ株式会社、株式会社ヒラミネ、旧迫田邸、東シナ海の小さな島ブランド株式会社



PROJECT DESIGN TUG

リトラボパートナーズである鹿児島県在住イラストレーター竹添星司さんと屋久島八万寿茶園の渡邊桂太さんをマッチング。観光客のニーズに応えるノンアルコールビールの新商品開発を支援。

屋久島

「雨晴嗜好」

屋久島八万寿茶園
× 竹添星司 氏

2023

EVENT 2.17-2.19

鹿児島離島の見本市
「&island」開催 in マルヤガーデンズ

INTERNSHIP 2.28-3.4

「かご島インターン」の開催
in 硫黄島+上飯島

全国公募から選ばれた鹿児島離島へのインターン生3名が、三島村(硫黄島)株式会社において、上飯島の株式会社ヒラミネに3泊4日の短期インターンを実施。



RADIO 9.3-

鹿児島離島ではじまっている挑戦や小さな暮らしを届けるポッドキャスト

「小さな暮らし RITOLAB LIFE STORY」
配信スタート

EVENT 7.14

セイルミーティング オンライン開催

参加人数: 約50名

コアメンバーを中心とした関係者・離島で活動する人・離島の活動に関心がある人など約60名が参加。課題の抽出、離島同士のつながりの必要性の問いを投げかける役割を担う。また参加者の課題を洗い出し、相談会やインターンにつなげる。離島の住む人同士のつながりの必要性を感じる機会を創出した。課題を話せるつながりを新しく作る。参加者それぞれの課題を把握する、つながりによる課題解決の可能性を探る時間となった。



FW 9.28-9.30

次世代の離島人材育成フィールドワーク

RITOLAB NEXT in 奄美大島

次世代の離島人材の育成と交流を目的に、RITOLAB NEXT in 奄美大島にて2泊3日のフィールドワーク研修を実施。今回のフィールドワーク先は、奄美大島。先駆的な取り組みをされている事業者の方々に講師としてお招きし、研修を実施。また、リトラボのこれらを見つめるワークショップを通して、リトラボの構想や可能性についても互いに意見交換をしながら、リトラボの未来を共に考える時間となった。

開催日時: 9月28日より2泊3日

開催地: 奄美大島

事例発表: 一般社団法人 E'more 秋名、コミュニティ & チャレンジスペース HUB a nice d!、とよひかり珈琲店/14hikari coffee inn、一般社団法人 TAMASU



2024

EVENT 12.8-1.10

鹿児島離島の見本市
「&island」開催
in D&DEPARTMENT KAGOSHIMA

INTERNSHIP 2.12-2.16

「かご島インターン」の開催
in 屋久島+上飯島

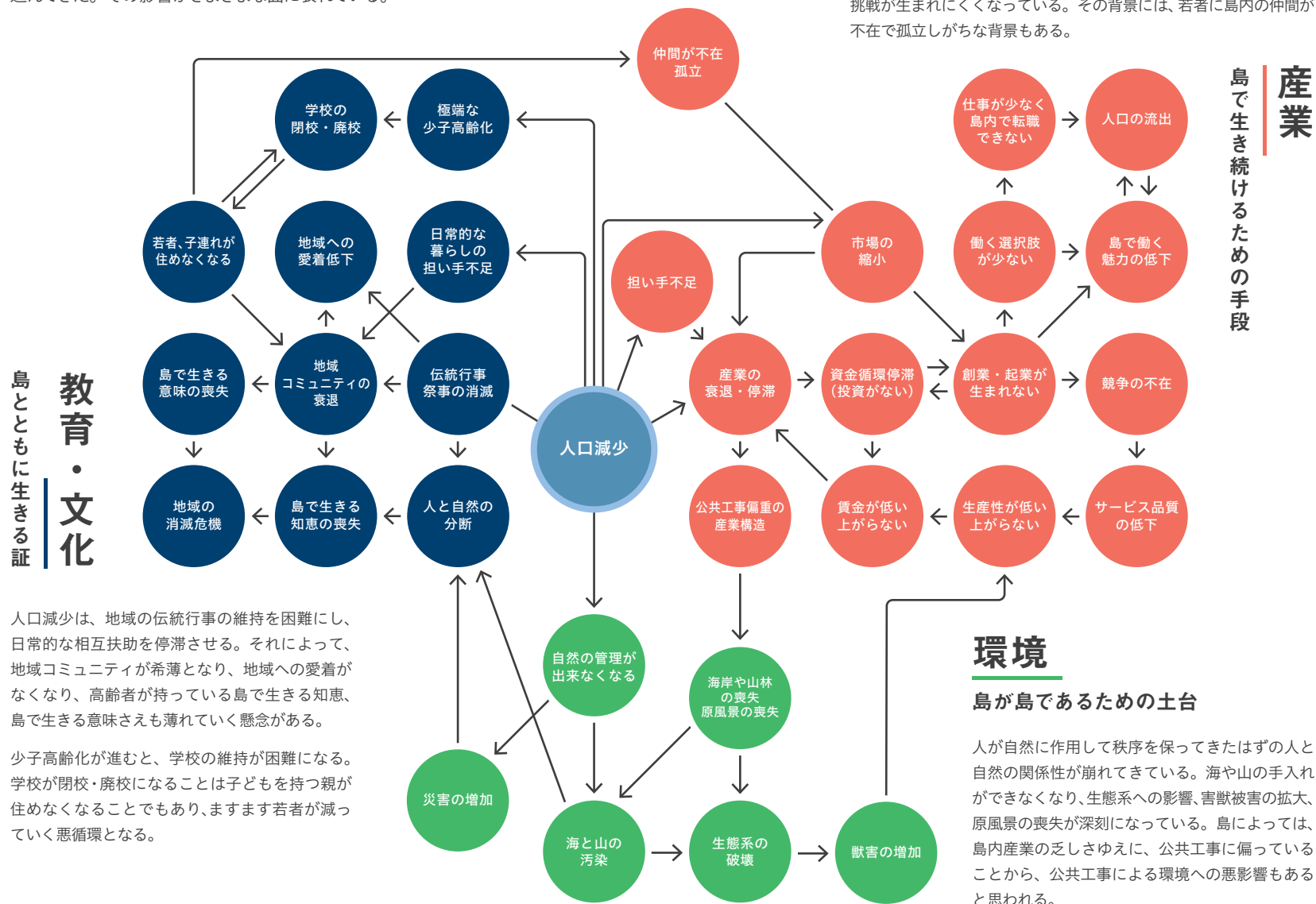
全国公募から選ばれた鹿児島離島へのインターン生3名が、3泊4日の短期インターンと地域交流を実施。



鹿児島離島の課題構造分析

鹿児島離島は、その条件不利性から人口減少が本土よりも先んじて進んできた。その影響がさまざまな面に表れている。

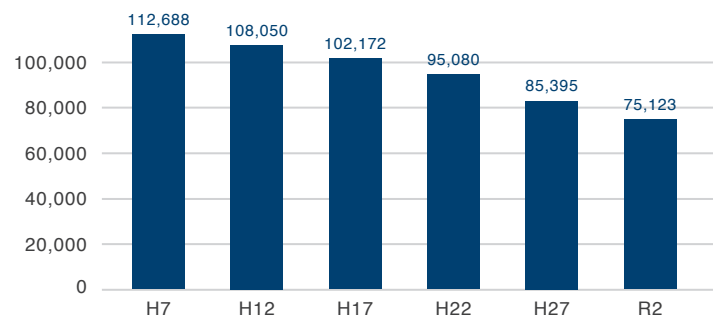
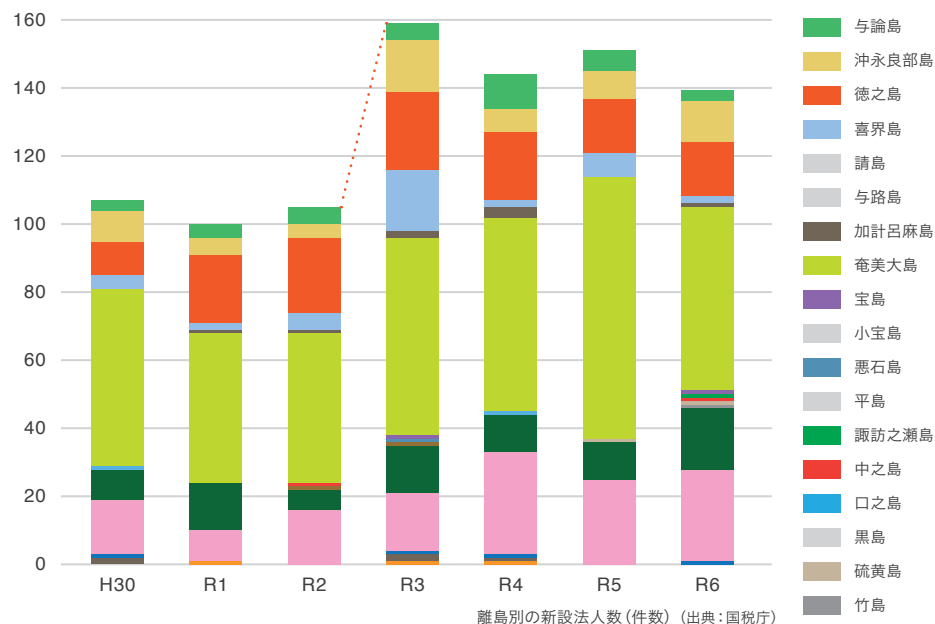
市場の縮小により産業の成長が阻害され、担い手不足により事業の継続が危ぶまれている。その影響を受けて、島内の資金循環の停滞、挑戦が生まれにくくなっている。その背景には、若者に島内の仲間が不在で孤立しがちな背景もある。



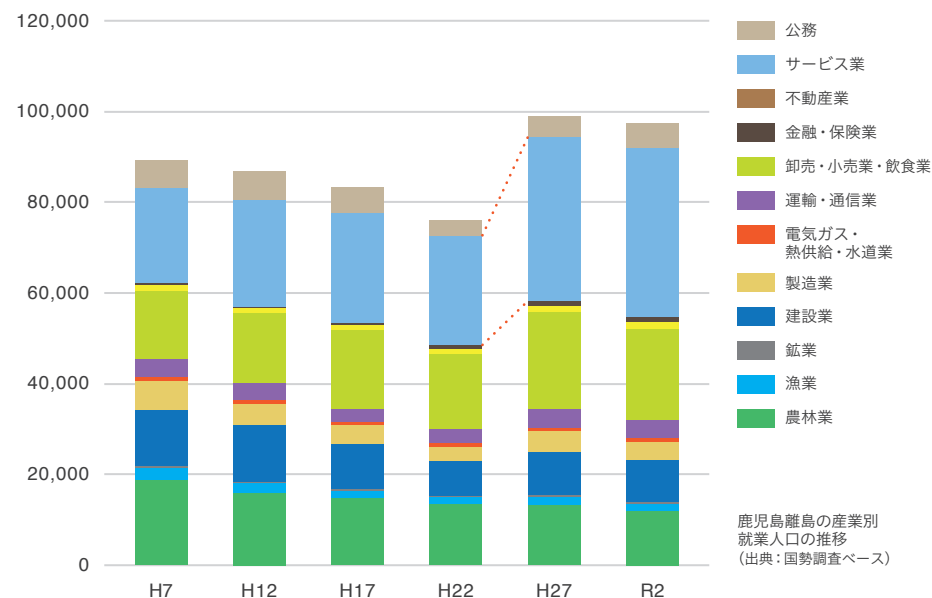
生産年齢人口は 減少している中で、 新設法人数は増加傾向。

鹿児島離島の生産年齢人口は年々減少している一方で、新設法人の数は増加傾向にある。

コロナ禍であったにも関わらず、鹿児島離島で新たなチャレンジが生まれている傾向とも読み取れ、その転換点とも言えそうな令和2年から令和3年の変化が興味深い。



鹿児島離島全体の生産年齢人口の推移 (出典: 国勢調査ベース)



第1次、第2次産業の 就業者数は減少、 産業のサービス化が進む。

鹿児島離島の産業別就業人口の推移を眺めると、第1次産業(農林業、漁業)、第2次産業(鉱業、建設業、製造業)の就業人口は大きく減少している。一方で、インフラ(電気ガス・熱供給・水道業)、卸売・小売業・飲食業、不動産業、サービス業の就業人口が増加しており、地域で大きなシェアを占めるようになっていく。

経済活動において、モノを作る産業に比べてサービス産業の比重が増大することを「産業のサービス化」と呼び、経済が成熟していくほど、サービス化していく傾向がある。

これらの変化は、市場・消費者がモノ(製品)からコト(経験)、さらに「イミ(価値)消費」の重視へと価値観を変化させていることが背景にある。

「産業のサービス化」は、第一義的には、第3次産業の比重が大きくなる現象であるが、第1次・第2次産業において、技術開発や企画・デザインなど、直接生産にかかわらない部分の比重が高まることも、産業のサービス化と呼ばれる。

鹿児島離島全体では、
厳しい人口減少。
一方で、小規模離島を中心に
人口増加傾向が
見られるところも。

鹿児島県離島全28島の人口は、平成7年は約20万人あったものの、令和2年には15万人を下回るまで減少している。

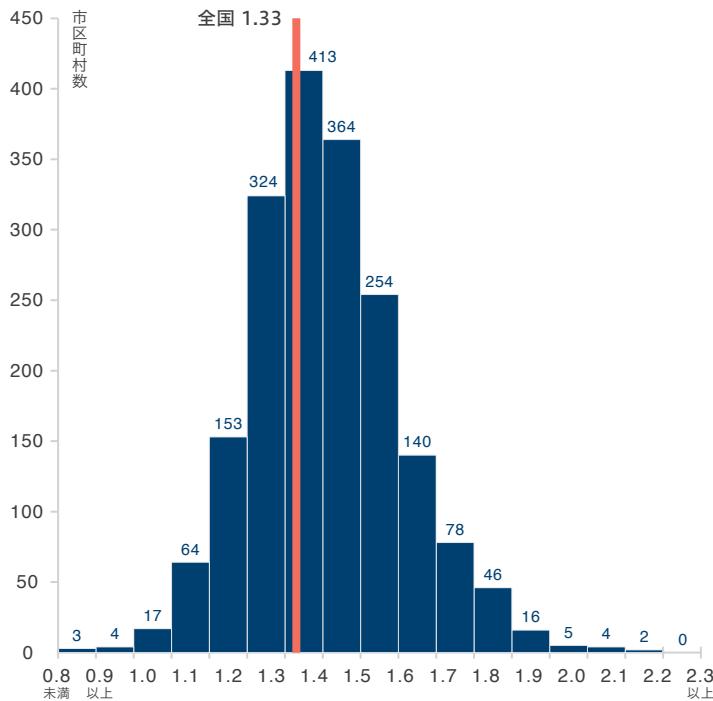
各離島の減少率を見ると、人口規模が10,000人以上の離島(種子島、奄美大島、徳之島、沖永良部島など)は、約25%の人口減少率であるものの、それより小さい離島ではさらに減少率が高い。そのような中で、十島村の諏訪之瀬島、平島、悪石島、小宝島、宝島では、平成7年と比較して人口は増加している。

これは、平成22年以降、十島村が定住促進策(定住促進のための定住促進生活資金助成制度、子育て支援施設、郵便局・ゆうちょ銀行の整備など)に取組み、定住しやすい環境づくりを行ってきた効果と考えられる。

特殊な動向としては、人口が0人になった新島が、令和元年に元島民の夫婦が転入したことで無人島から解消された事例や、平成27年の新岳の噴火によって全島避難をした口永良部島が、帰島した後に人口を大きく減らした事例などが特徴的である。

島名	H7	H12	H17	H22	H27	R2	減少率
獅子島	1,082	981	851	757	689	647	40.2%
桂島	26	32	18	13	8	12	53.8%
上甌島	3,481	3,132	2,750	2,488	2,174	1,862	46.5%
中甌島	429	393	347	308	224	186	56.6%
下甌島	4,016	3,695	3,109	2,780	2,321	1,935	51.8%
新島	13	12	5	4	0	2	84.6%
種子島(西之表市)	19,822	18,866	18,183	16,940	15,967	14,706	25.8%
種子島(中種子町)	10,027	9,675	9,194	8,696	8,135	7,539	24.8%
種子島(南種子町)	7,422	7,154	6,751	6,218	5,745	5,445	26.6%
馬毛島	0	-	15	11	0	0	-
屋久島	13,426	13,706	13,614	13,437	12,913	11,765	12.4%
口永良部島	167	169	147	152	0	93	44.3%
竹島	119	91	83	83	87	72	39.5%
硫黄島	149	150	140	127	130	139	6.7%
黒島	245	259	239	208	190	194	20.8%
口之島	177	173	125	138	159	103	41.8%
中之島	197	183	173	143	171	146	25.9%
諏訪之瀬島	71	74	49	52	73	78	-9.9%
平島	85	84	82	81	71	107	-25.9%
悪石島	71	80	94	72	79	90	-26.8%
小宝島	48	43	48	54	55	69	-43.8%
宝島	127	119	102	117	148	147	-15.7%
奄美大島(奄美市)	53,410	51,898	49,617	46,121	43,156	41,390	22.5%
奄美大島(大和村)	2,092	2,104	2,013	1,765	1,530	1,364	34.8%
奄美大島(宇検村)	2,424	2,243	2,048	1,932	1,722	1,621	33.1%
奄美大島(瀬戸内町)	9,828	9,580	8,937	8,211	7,614	7,319	25.5%
奄美大島(龍郷町)	5,889	6,002	6,002	6,078	5,806	5,817	1.2%
加計呂麻島	1,752	1,704	1,547	1,428	1,262	1,080	38.4%
与路島	188	165	137	103	84	70	62.8%
請島	249	200	161	132	82	77	69.1%
喜界島	9,268	9,041	8,572	8,169	7,212	6,629	28.5%
徳之島町	13,640	13,127	12,892	12,090	11,160	10,147	25.6%
天城町	7,365	7,212	7,020	6,653	5,975	5,517	25.1%
伊仙町	8,151	7,769	7,255	6,844	6,362	6,139	24.7%
沖永良部島(和泊町)	7,869	7,736	7,436	7,114	6,783	6,246	20.6%
沖永良部島(知名町)	7,456	7,435	7,115	6,806	6,213	5,750	22.9%
与論島	6,210	6,099	5,731	5,327	5,186	5,115	17.6%
合計	196,991	191,386	182,602	171,652	159,486	149,618	24.0%

離島別の人口推移と減少率(H7-R2)
(出典: 国勢調査ベース)



市区町村別にみた合計特殊出生率の分布
(出典: 平成30年~令和4年 人口動態保健所・市区町村別統計の概況)

合計特殊出生率の高さは、
全市区町村の中でトップクラス。

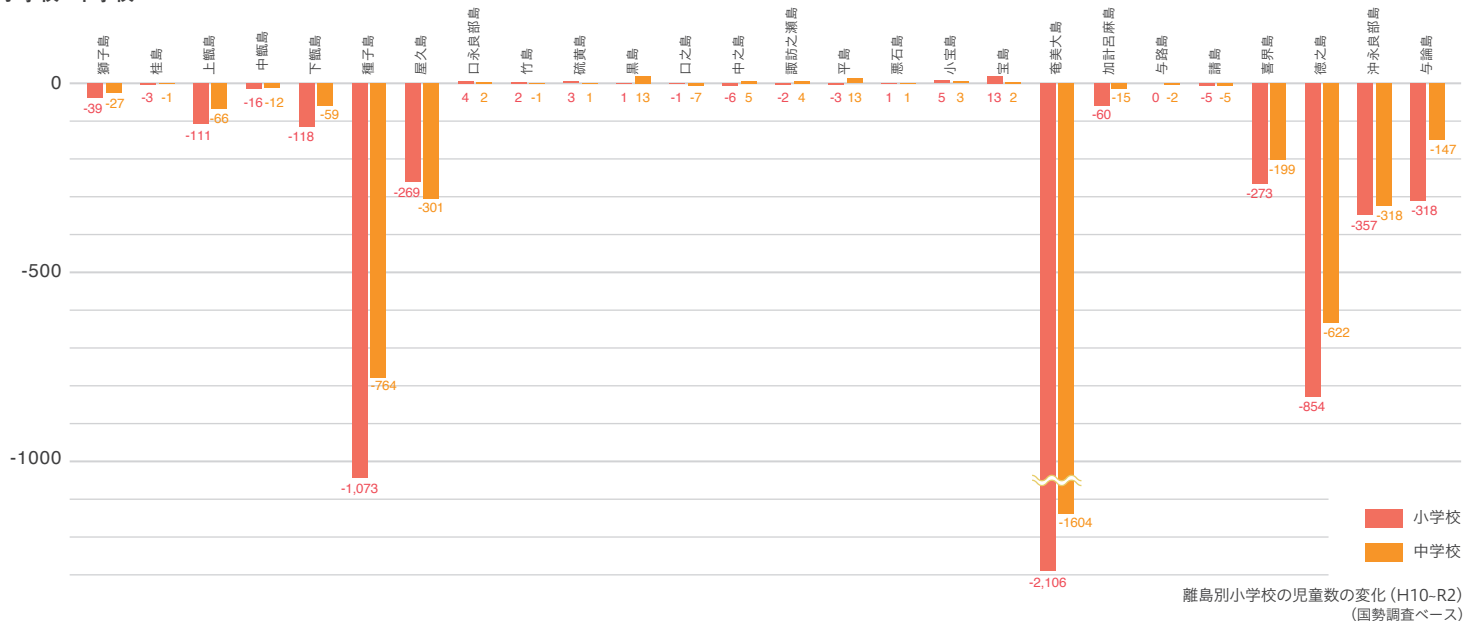
鹿児島離島の合計特殊出生率は全国トップクラスである。徳之島町が合計特殊出生率が日本一高いことはニュース等でも知られているが、それ以外の離島も含め、鹿児島県内で離島を有する市町村別の合計特殊出生率を下記の分布図でみた場合、全国1887市区町村の中で、すべての市町村が上位28.9%に含まれているうえ、三島村(1.60)、十島村(1.57)、与論町(1.62)を除くと、他すべては上位8.0%に入るほど出生率が高い。

項 目	合計特殊出生率	備 考
全国	1.33	
鹿児島県	1.62	

項 目	合計特殊出生率	備 考
出水市	1.77	一部離島(桂島)
長島町	1.84	一部離島(獅子島)
薩摩川内市	1.6	一部離島(甌島列島)
三島村	1.57	竹島、硫黄島、黒島
十島村	2.11	口之島、中之島、諏訪之瀬島、平島、悪石島、小宝島、宝島
西之表市	1.71	種子島
中種子町	1.99	種子島
南種子町	1.99	種子島
屋久島町	1.71	屋久島
奄美市	1.75	奄美大島
大和村	1.85	奄美大島
宇検村	1.77	奄美大島
瀬戸内町	1.82	奄美大島、加計呂麻島、請島、与路島
龍郷町	1.82	奄美大島
喜界島	1.89	喜界島
徳之島	2.25	徳之島
天城町	2.24	徳之島
伊仙町	1.98	徳之島
和泊町	1.87	沖永良部島
知名町	1.79	沖永良部島
与論町	1.62	与論島

鹿児島県内の離島を有する市町村の合計特殊出生率
(出典：平成30年～令和4年
人口動態保健所・市区町村別統計の概況)

小学校・中学校



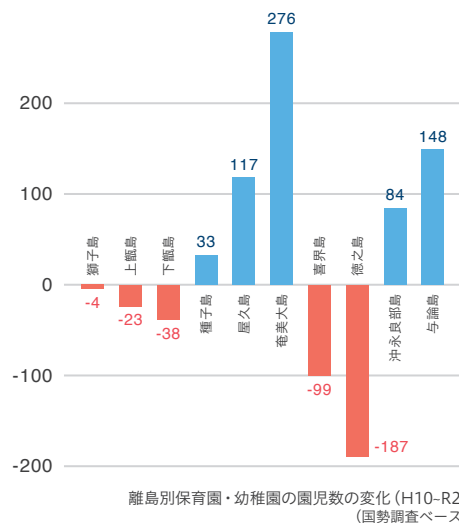
小学校～高等学校までの 児童・生徒数は減少も、 未就学児は増加傾向。

離島の未来の象徴である子どもたちの状況(平成10年と令和2年の変化)を見ると、未就学児が増加している離島が複数みられる。特に増加数も2桁から3桁と多いことも特徴的である。

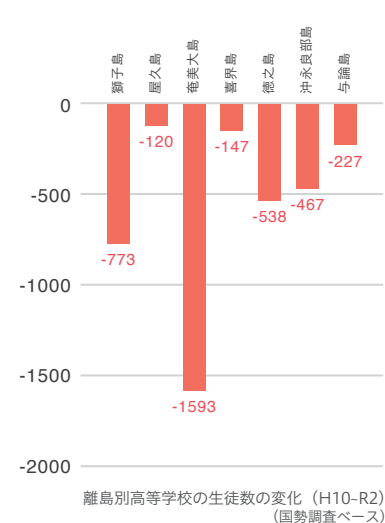
一方で、小学校以上では多くの離島で児童・生徒数が減少しており、増加しているとしてもわずかである。

そのため、未就学児の増加は、社会増(子どもをもつ家族の移住など)による影響が大きいと考えられる。

保育園・幼稚園



高等学校



日本離島業界初 **28** 島 **22** 自治体を越境する

ローカルコミュニティ財団
※鹿児島県としても初

島で生きる人たちの小さな暮らしとその挑戦を応援し、
人が減り行く社会においても頼りあえる繋がりと、
やさしいお金が巡る仕組みをつくる鹿児島初のローカル
コミュニティ財団設立プロジェクトがはじまります。



とう しょ き きん

島嶼基金

KAGOSHIMA ISLANDS FUND

かごしま島嶼ファンド

令和元年、「鹿児島離島文化経済圏」（通称：リトラボ）が立ち上がり、産業振興を中心に鹿児島離島の支援に取り組んできました。そこで培った経験と、島への想いをもった繋がりが、今回の財団設立の基盤となっています。たった一人から始まった物語が今、リトラボでの出会いを通じて交流を深めた仲間たちと共に、財団設立に向けて取り組んでいます。

より多くの挑戦が生まれる海域にするため、コミュニティ財団「一般財団法人かごしま島嶼ファンド」を設立するプロジェクトを立ち上げました。海という存在は、島と島を隔てるものではなく、繋いでいるということ。たった一人からでも挑戦を始めることはできるということ。最後まで諦めずに、共に走ってくれる仲間たちがいる財団が、鹿児島の小さな島々に必要です。



LINE



note



instagram

@kagoshima_islands_fund

新たに商品が生まれた数



新たな事業者マッチングが生まれた数

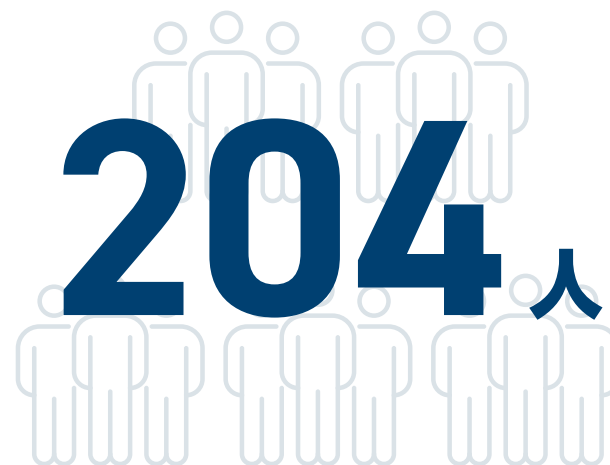


46 社

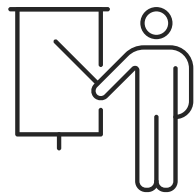
新たな会社が生まれた数



新たな島の応援団員



セイルミーティング 参加人数



581人



2019年度

95人

2020年度

81人

※コロナ禍により
オンライン開催

2021年度

58人

2022年度

52人

※オンライン開催

2023年度

75人

※登壇者・運営スタッフ含む
2日間累計の来場者数

2024年度

220人

島祭 Shimasai DAY1のみ90人

新たなイベントが生まれた数



新たなインターン生

かご島インターン



鹿児島離島の見本市 & island

2022年開催

来場者数 **940**名

売上
1,152,975円

2023年開催

来場者数 **760**名

売上
1,110,294円

総来場者数
合計

1,700人

総売上

2,263,269円

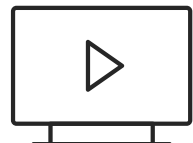
新たな売上高



78,950,000円

Youtube チャンネル

鹿児島離島文化経済圏



チャンネル登録者数

212人

総再生回数

12K

総再生時間

1,291時間

ONLINE RADIO

小さな島の暮らし RITOLABO LIFE STORY

登録者数

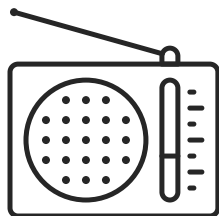
181人

放送回数

31回

総再生回数

5,788人



公式Instagram フォロワー

鹿児島離島文化経済圏
@ritolab.kagoshima



496人

公式Instagram フォロワー

&island
@andisland_kagoshima



418人

1 SAIL MEETING

南北600キロに広がる鹿児島県下28の有人離島。今年度は、それぞれの異なるテーマを持って地域おこしに取り組む島民と本土地域の民間・行政などあらゆる垣根を超えたパートナーとともに、鹿児島離島の「課題」を「価値」に変えていく。基調講演や事例発表、離島地域における課題を探るグループトークなどの勉強会や意見交換等を実施した。



2 RITOLAB FIELD WORK

2019 種子島・硫黄島
2020 屋久島・獅子島（オンラインフィールドワーク）

離島地域において事業拡大を目指すものを対象に、離島の事情を踏まえた事業拡大および人材ネットワークの強化、事業創出を促進することを目的として、離島各地でフィールドワークを開催。コロナ禍では、オンラインでのフィールドワークを実施した。



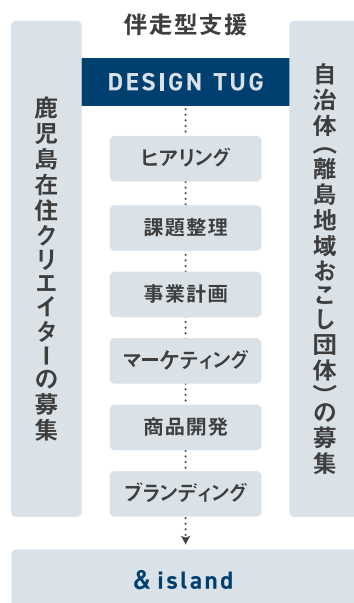
3 RITOLAB ONLINE SCHOOL

それぞれの異なるテーマを持って地域おこしに取り組む島民と本土地域の民間・行政などあらゆる垣根を超えたパートナーとともに、鹿児島離島の「課題」を「価値」に変えていくためのオンラインスクールを開校（港）した。

全5回講座 / Youtube 配信
再生回数 1,759回再生



SAIL MEETINGに参加した県内のクリエイターと地域おこし団体それぞれにDESIGN TUGへの参画を呼びかけ、以下のクリエイターの過去の実績を鑑みて応募者の中から地域おこし団体とのビジネスマッチングを行なった。



【十島村】mon・de・banana

中之島農産物生産組合 × banana works [霧島市]

中之島農産物生産組合の生産するトカラ産三尺バナナをまるごと一本使用した、新感覚「揉んで美味しい」本格バナナスムージーを開発。収穫から熟成までの期間が短い原材料としての課題（特徴）を冷凍した。一般的には、冷凍保存は、生鮮食品に比較して新鮮でないイメージを与えかねないイメージダウンにつながるケースがあるが、解凍して揉んで飲むという「コト」を楽しむデザインを行なったことで、プラスのイメージにつながった。

また、商品開発だけにとどまらず、「THE BANANA LABORATORY」という「島バナナを通して笑顔あふれる豊かな社会を」をコンセプトに、島バナナをまるごと楽しめるユニークな商品で、食べた人が思わず笑顔になるような体験を提案するプロジェクトを同時に立ち上げた。SNSも活用し、公式インスタグラムを新たに立ち上げて中之島の取り組みの情報発信も始めた。

トカラ産島バナナがまるごと一本

mon・de banana
Banana Smoothie

揉んで美味しい、
本格バナナスムージー

島バナナ特有の濃厚な甘さときっぱりとした酸味も、
清らかな食感でいつでも美味しくお楽しみいただけます。
自分好みのやわらかさになるまで解凍してmondeお召し上がりください。



期間限定でmon・de bananaを盛り上げるために購入者限定でオリジナルTシャツが当たるInstagramキャンペーンなども実施し、消費者との交流も実施した。

【屋久島】とびっきり、とび飯。

株式会社アイランドコーポレーション
× 中野由貴+桑原田優佳

屋久島といえば、飛び魚が産物として認知されてきた一方で、お土産として生の飛び魚を自宅に持ち帰るのは容易ではなく、お土産の需要はありながらも、その難しさに販売に至っていなかった。

そこで、アイランドコーポレーションを中心に、小売店と漁師、レシピ開発者、加工者の4者により新商品開発を行い「漬け」にすることで、お土産品の開発を実現させた。また、商品パッケージのデザインだけでなく、商品や屋久島地域を紹介するためのタブロイド紙の撮影・インタビュー・デザインなども行なった。



また、商品パッケージのデザインだけでなく、商品や屋久島地域を紹介するためのタブロイド紙の撮影・インタビュー・デザインなども行なったほか、動画製作も行ないYoutubeにて公開している。

<https://www.youtube.com/watch?v=thgQd-aRh9k>



5 &island

「かご島とつながる港」をコンセプトに、鹿児島島の離島から生まれた様々な商品を通じて、島の暮らしとそこに暮らす人々の想いや風景と出会うフェア。鹿児島離島に関わる離島地域おこし団体や個人事業者の見本市となる物産展並びにプロジェクト展示会、コミュニティ登録につながるPR活動の場を実施した。

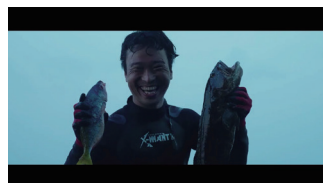
出店事業者数：**7** 島

(獅子島・上甕島・種子島・屋久島・硫黄島・中之島・宝島)



6 KUMAGE LEADERS SCHOOL

種子島、屋久島、口永良部島、馬毛島を含む海域にて、地域活性化に取り組む人財や団体等を育成し、ネットワーク化を図ることを目的とした人材育成プログラム(熊毛リーダーズスクール)を企画・監修した。研修会の中で提案された地域活性化プロジェクトを実現するための伴走支援も行い「稼げる地域づくり」の創出や持続可能な地域づくりを推進するためのコミュニティ形成に取り組んだ。



7 かご島インターン

次世代の離島人材の育成と交流を目的に、離島を体感する『かご島インターン』を2023年に初開催。初年度は、株式会社ヒラミネ(薩摩川内市・上甕島)と、株式会社いおう(三島村・硫黄島)の2社が受け入れ企業となりました。



どんな体験となりましたか？

ヤマグチさん

仕事で甕島を訪れたことがあり、「新しいものを取り入れるのではなく、島にあるものを活かして、その中で何ができるのかという街づくりのありかたに憧れた」という、ヤマグチさん。

インターンを通して、「仕事で暮らしにつながっている(お金をもらって食べられるとかではなく)」ということを感じました。今は、仕事と暮らしのバランスをとるのが難しいと感じているからかもしれませんね。すれ違う人と挨拶があったり、日常の中に自然がある。この環境にとってもリラックスできました。」と。ここでの生き方に居心地の良さを感じてもらえたようです。

スズキさん

「横浜生まれ、東京育ちで祖父母の家も首都圏のため、本当に田舎に縁がなかった。行ったことがないからこそ、ずっと田舎に憧れがあって、大学の間にいろんな地方に足を運んでみたら『こっちの方が肌が合うな』って感じました。」そう話すスズキさんは、硫黄島の知人を経由で来島されたことがきっかけとなり、今回のインターンに参加されました。

ヒラミネで働いたことでみんなが知り合いということを感じた言います。「お互いの仕事が見えている感じ。副業みたいに朝は漁師さん、その後土木作業をされている方もいてそれが新鮮で、1人がやる役割が複数あって、役割が固定化しないのがいいな」と。お昼休憩は海でゆっくり過ごすなどして、甕島で働くことを楽しんでもらえたように感じます。

3泊4日の島暮らしを通して、甑島で働くことや移住を検討している方にアドバイスするとしたら？

いろんな人（地元の方や、移住してきた方など）にどう生きてきたのかを聞いてみるといいですね。直接会いに来れたらもちろんですが、SNSなどでもコンタクトは取れると思うので、自分の生活と合わせて想像してみてください。

とりあえず来てみるのもアリなのでは？移住前提で来島するのではなく、のんびりしてみようという気持ちなどで何度か来島してみて。ビジョンが合えば段階踏んで決断していけたらいいんじゃないかなと思いました。島ごとに温度感などあると感じたので、短期的でもやってみるといいかも。

インターンシップを終えて



今回のインターンシップを機に、初めて硫黄島に訪れた康平さん。他者を思いやる心を持った子どもたちとの出会い、この島で継承されている生業の見学やそこで働く人々と交流し、「この島は、人を思う心の原点に戻れる」感覚を持ったと話します。その感想を聞いた紫寿代さんは、「仕事をするにしても、島民それぞれがお互いに関係性が深く、自分が快適に生きるための鍵を相手が持っているからこそ、相手への思いやり、想像力を持つことにつながるのかも」と、人を思いやる心がこの島で育まれている理由を教えてくださいました。

また、働くことと生きることが繋がっている島民の暮らしぶりを間近で体感したことで、康平さんは、実際に島で暮らそうとしたときに自分はどの役に立てるのか、という問いを持ったと話します。今回は、写真家として、島の人々の暮らしやこの島独自の景観を記録したり、紫寿代さんの関わる椿の商品の宣伝写真の撮影をしたりと、訪れた硫黄島のことを想い、自ら関わっていく姿がありました。

8 RITOLAB LIFE STORY

鹿児島島の島に暮らす人々や離島にまつわる方々をゲストにお招きし、島の暮らしをのぞき見るオンライントークラジオ「小さな島の暮らし RITOLAB LIFE STORY」を配信した。

Youtube 配信

1,004 回再生

Podcast 配信

Stand.fm

2,495 回再生

Spotify Podcast 3,293 回再生



9 島祭 Shimasai 2025

鹿児島県の有人離島におけるさまざまな事業者の挑戦事例の報告会や、持続可能なエコシステム形成に向けたカンファレンスを実施した。



DAY1 2025.2.14(金)	
鹿児島離島文化経済圏の取り組みにおける事例報告会	
鹿児島離島文化経済圏「令和6年度鹿児島地域おこし広域コミュニティ形成事業」委託事業	
12:00	開場
13:00	開会
13:20	鹿児島離島文化経済圏のこれまで 東シナ海の小さな島ブランド株式会社 山下賢太
13:30	基調講演「世界が変わるシマ思考」 講師 離島経済新聞社 編集長 榎本あつこ氏
KUMAGE LEADERS SCHOOL	
14:15	・口永良部島初の水産加工場
14:50	・種子島からまたね!と言える関係づくり
15:10	・歴久島の森を世界へクラフトサウナの挑戦
RITOLAB	
15:45	・人口50人の竹島からの竹取り物語
16:05	・日本最後の秘境トカラ列島バナナドリーム
16:25	・海が繋いだ新会社SANROKU Inc.の誕生
17:05	・硫黄島からの挑戦 hikariworks
17:20	・椿の風景を守り育てる
17:35	琉球から奄美～薩摩の島々をつなぐ 歴久島民謡「まっばんだ」
17:50	クロージングトーク

DAY2 2025.2.14(土)	
鹿児島離島地域の持続可能なエコシステム形成に向けて	
中小企業庁創業・協業支援課 「地域の社会課題解決を支援するためのエコシステム構築実践事業」委託事業	
10:00	開場
オープニングセッション	
10:30	ISLAND ZEBRA CONFERENCE 沖永良部 先人から託された島の魂「みやらび」
10:50	円卓テーブルセッション:アイスブレイク
11:00	基調講演「大地を再生する経済 「ユートピア・アグリカルチャー」的思考 株式会社ゼブラアンドカンパニー 阿座上 陽平氏
11:45	ランチタイム:島々の食材を使用したケータリング
トークセッション 各45分	
12:30	島とこれからのすみか
13:15	地球に学ぶ探究学習 暮らしと文化を伝える
14:10	暮らしと文化を伝える
14:55	事業承継と人材育成
15:40	持続可能な産業を育てる
16:35	ユニバーサルな離島医療と福祉
17:20	Uターンと若者
18:15	かごしま島唄ファン
19:10	クロージングトーク



海が繋いだ新会社 SANROKU Inc.の誕生

荒木政孝さん／荒木真理さん／山下賢太さん／埜口裕之さん

リトラボがきっかけだった



荒木政孝さん：SANROKU 株式会社は、2021 年の 3 月に誕生しました。元々は、屋久島 3 社と甕島 1 社の 4 社で始まった会社で、そこからさらにトカラの仲間が増え、4 期目が終わろうとしているところです。私は代表取締役で、屋久島で株式会社アイランドコーポレーションの社長もしております荒木と申します。そして甕島から、何かいい感じにするブランドマネージャー・山下賢太さん。十島村の中の島から、頼れるトカラ事業部プロダクトマネージャー・埜口裕之さん。最後が私の妻でもあります、夢見がちな男たちをまとめる影の支配者・荒木真理。あと、時々現れるフードプランナーの永網未歩さん。屋久島ヒトメクリという屋久鹿の肉を使うレストランをしていて、食肉加工の免許も持っていてジャーキー等も作っています。あとは屋久島で猟師さんのパートナーとなる屋久犬の血統を守る活動をしています。

山下賢太さん：SANROKU 株式会社は、鹿児島離島文化経済圏・リトラボをきっかけに立ち上がった会社です。約 6 年間の活動の中で出会った仲間達や、新しく生まれた商品やサービスがあり、新会社も立ち上がった。県の一部委託事業ですが、想定していなかった波及効果まで生まれてきたんです。

ももとはフィールドワークでいろんな島に入っていたんですが、コロナのタイミングで現地に行くことが叶わなかった年が 1 年だけ

ありました。そこでオンラインフィールドワークという、オンラインで収録しながら、実際に受け入れ準備を進めていただいていた屋久島の事業者のみなさんに集ってもらい、荒木さんが取りまとめをしながら、「自分たちの地域・島の課題って何だろう、どんな夢があるんだろう」とみんなで話をしていったのが最初のきっかけです。その時の様子はいかがでしたか？

荒木政孝さん：コロナ禍というのもありましたし、種子島のフィールドワーク行く中で、屋久島でもなんとか成果を残そうと頑張っていました。それで当時一緒にフィールドワークに取り組んでいた人と、屋久島の黒豚をブランド化する事業をやっているというのが実はこの会社の始まりでした。

連携事業の難しさ

山下賢太さん：ちょっと急ですが、なぜ肉なのか少し説明を。世界中のゲストが世界遺産の屋久島に訪れているのにも関わらず、屋久島産の肉や魚や野菜っていうのが全部中央市場に向けて出荷されていく状況で、島内のどこで屋久島産のものが買えるのか？そんな場所はかなり限られている。それで、しっかりと屋久島産のものが屋久島でまわっていくような、地域内の商社的な役割がちょっと弱いところ、屋久島のフィールドワークの中で見えてきた一つだったんです。肉はやっぱり屠殺場の問題などいろいろあって結構ハードルが高く、だからこそノリと勢いでいけなかと、肉の事業を最初にスタートすることになりました。スタートできなかったんですけど（笑）大失敗で出鼻をくじかれるっていう。

荒木政孝さん：とりあえず 1 年目は、いただいた豚肉 1 頭分をメンバーたちに送りつけて買ってもらって。1 年目の売上は 10 万円、完全に自爆営業的な感じ。他の地域や他社と連携して一緒に何かを始めるという、最初は結構ふわっとして自分達もある種半信半疑で、どういう風になってくのかなと思いつつ、解像度がまだまだ低く、思いだけで突っ走っちゃったこともありました。

山下賢太さん：懐かしいです。そんな夢見がちな計画性のない男たちの動きを間近で見ていた真理さんは、どんな心境でしたか。

荒木真理さん：集まって会社をやるっていうのが私の中では「どうなんだろう？」と心の中では思ってたんですけど ... 言うことを聞かないでどんどん進むタイプなので、見守っていました。

荒木政孝さん：それで結局この会社どうする?となり。潰すか、残すんだったら何かしらやらないといけない。それでまず決めたのが、言い出しっぺの私が引っ張っていこうと。最初はみんな合議制でやってたんですが、それを独裁制にしますと（笑）今からいろんな離島や事業者で連携していく中で、みんなで仲良く決めていくというのはなかなか難しいぞということはいえたいですね。リスクも背負いながら中心になって引っ張っていく人がいないと、事業は進んでいけないよというのが一つ、皆さんに伝えられる教訓なんじゃないのかなと。



あとは社名変更。当初三つの麓で「三麓」だったんですがどうもしっくりこなくて、そしてインターネットで社名占いというのをやったら、「ビジョナリーなだけで全く中身の無い会社で分裂します」と（笑）もう最悪な画数。それでアルファベットにしてみたところ、最強の運勢になった。もう何事もうまくいくみたい。ちょうど取締役が一人辞めるにあたって登記を変更しないといけないタイミングでして、これは変えるしかないでしょっていうことで。最後は神頼みでね（笑）それくらいスタートはふわふわしていたということです。

仲間になったから、頼り合えた

荒木政孝さん：それから、屋久島はニンニクの栽培を地域おこし協力隊が手がけていて、ニンニクが一つの産業になっていく可能性があると感じていて。自分でも一回作ってみて出来たので、これで何か作ろうという話を投げかけました。その時に甕島でキビーニャカウダというキビナゴのバーニャカウダの加工品があったんですが、それをトビウオで作ろうとなりました。屋久島のニンニクとトビウオで「トビーニャカウダ」と売り出そうと。それが SANROKU のヒット商品になりました。今うちが手がけている離島間連携のハシリになった商品です。そこからデザインタグ等で出会ったのが埜口さん。今までは甕島としか繋がっていませんでしたが、トカラ列島ともデザインタグで繋がる仲間ができました。それによって、トカラ列島がただ屋久島から見える景色や島影ではなくって「元気かな」と思う対象になりました。それが外と連携する大きなターニングポイントだったなって思いますね。

埜口裕之さん：そうですね。&island のデザインタグで、デザインタグで切琢磨磨しながら作った商品を買ったり他のデザインを見たり、その中で販売者の方とも話をするようになりました。だからすごく親しみがあるというか、みんなそれぞれの島で頑張ってるんだと体感するようになりました。トカラ列島は生産や加工には余力があるけれど、まだまだ売力は弱い。需要を自分たちで作り、営業準備しなければいけない中で、アイランドコーポレーションとの連携ですごくお互い良い役割分担が見えてきました。

荒木真理さん：屋久島からもトカラ列島へ2、3回行きました。デザインタグで「とびっきり、飛び飯。」という商品を作らせていただきましたが、そのお披露目として。あと他の離島の皆さんとお会いできた &island というイベントが、私の中ではすごく大きな出会いの場になりました。その2、3日間ぐらいでしたが皆さんとお話すると、流通が不安定だったり人口が少なかったり物がなかったりという、離島ならではのいろんな悩みを持っています。そんな中でも、それぞれ自分の島を盛り上げようと頑張っている、同じような目標を持っている人たちがいるんだというのが、私の中ではすごく衝撃的でした。疲れてたというのがありますが、帰ってから数日間頭がぼーっとするぐらい。その後、この人達の見ている普段見ている風景や暮らし、人物にも興味が湧いてきて、ぜひ島に訪れてみたいと思うようになりました。私がいろんなところに足を運ぶようになり、そこから私が SANROKU に加入していくきっかけとなりました。

山下賢太さん：他の島の仲間を受け入れる機会は多くないと思いますが、わざわざ訪ねてきてくれたっていうのはどんな気持ちでしたか。

埜口裕之さん：トカラ列島は日本最後の秘境なので、訪れることができる方が少ない。鹿児島までは来られるけど、天候が悪いとかでなかなか来れないところなので、それでもなぜか真理さんは来れたんですよね。しかも2回。



山下賢太さん：僕が行く時は2回とも台風なんですけど。選ばれし者たちだけがいける。

まあこれって、取り組みではなくて環境なんですよね。関係性のデザインというか。稼ぐ地域づくりや産業振興とか販路開拓って、なんだか堅苦しくなりがち。そういう、うちの会社にこんなリソースあるよとか、プラットフォームを作って登録したら解決するみたいな単純なことではない。人と人が出会ってお互い信頼関係を作って、長い時間を重ねながら課題解決しようということ。お互い語り合ったり、飲んだり喋ったり、一緒にいろんな場所を見に行ったりすることで、この人面白いな素敵だな、この人の暮らしをもっと知りたい、応援したいなっていう思いや意欲が、気づいたら会社になって商品が生まれて、それを食べて美味しいっていう人がいる。誰かの顔と名前が浮かんで、自分たちの暮らしやビジネスができるっていうのはめちゃくちゃ幸せだと思うし、踏ん張れる理由にもなれる。SANROKU はそれを体現したんじゃないかなと思っています。

荒木政孝さん：商品についてですが、「太陽と情熱のリリタン」は、屋久島のパッションフルーツとトカラのパナナのコラボです。「タンカン胡椒」は柚子胡椒のタンカンバージョン。屋久島の完熟タンカンの果皮と、トカラ産の唐辛子で作りました。「屋久島氷菓」というジェラートブランドも立ち上げました。響きが老舗っぽいですが、まだ2年目ぐらい。ブランドロゴはすごくかわいらしいんですが、昔からその土地に根付いているような空気感をまとっています。また、「屋久島から見えている島も自分たちの地元と呼ぼう」と言い始めました。そう考えるとまずお隣の種子島。屋久島はまだ農業が盛んになりきれない部分もありますが、非常に農業が盛んな種子島とコラボしようということで安納芋味もあります。そうしたリトラボの繋がりがから生まれてきたコラボがしっかりと商品化していくケースがどんどん生まれていっています。

これから期待していること

最後に、会社が生まれたこれまでの動きの感想と、これから先どんなことに期待するかみたいなことを一言ずつ。

埜口裕之さん：この会社に私も救われた部分が大きいです。他の人たちにも体感してほしいなと。頑張って一生懸命やれば必ず見てる人がいる。リトラボに関わっていれば必ず何か報わ

れるんだと思って頑張ってもらえれば、コラボできたり今後に繋がっていくのかなと。僕としては本当に感謝しかない。これからの未来もすごく何かワクワクすることが起きるんじゃないかなというふうに思っています。

荒木政孝さん：私達は島に住んでるんですけども、単体の小さいシマから「海域」という新しいシマを生み出してって、そのシマを地元として進んでいくのが SANROKU なんだな、なんて思いました。今から私達の新しいシマを地元として、地元を盛り上げる地域商社的な動きをしていけばいいのかなと思っています。

荒木真理さん：ちょっとだけ妻ラボの話。私が個人的な興味でいろんな島に行って思ったのが、やっぱり離島は自営業で、夫婦や家族でやってる方達がすごく多いんです。そういうところで奥様とお話すると、現場でものを見ているのでリアルな話や地域の話も色々聞いて共感できるところもあって、お互いが励まし合える存在だなと感じました。それで今後私も自らいろんなところに行くので、妻たちも集って討論し学ぼうと。リトラボにくっつけて「妻ラボ」っていうのを勝手に立ち上げたんですけど、経営者の周りの環境を整えていくのが私達の仕事だと思っているので、そこを大事にやっていきたいなと思っています。

山下賢太さん：妻が妻ラボに行く度に、男達はみんなちょっと背筋を伸ばして、1週間前ぐらいから正しい生活を始めるっていうのが毎回の決まりなんですけれども。身の引き締まる思いでございます。妻ラボも SANROKU も、わりと自然発生的に、お互いの困りごとだったりとか、もっとこういうのがあったらいいのになという思いで始まったんですよね。今の自分の環境や会社のやり方とか枠組みではちょっとしきれないよねというところから。

このように、リトラボから島や地域を超えて会社が立ち上がったというケースもありました。課題ばかり見るのではなくて、そこにある可能性に向き合って、たくさんチャレンジを応援していきながら、いろんな島に顔を出していきたいなと思っています。是非商品をのぞいて話を聞いていただけたらと思います。

人口 50 人の竹島からの竹取り物語

NPO 法人みしまですよ / 竹のいえ 山崎 晋作さん

三島村・竹島について

人口 50 人の島、三島村・竹島の山崎晋作と申します。今日はちょっと船が欠航してしまって、残念ながら会場に行けませんが、今回は 50 人の島での挑戦と、挑戦を支えてくれるものについてお話をさせていただきます。



私は三島村・竹島の出身で、中学卒業と同時に島を出ました。11 年ほど前に竹島に U ターンし、翌年 NPO を立ち上げました。その後、竹島は食料品や日用品を売ってるお店がしばらくなかったのですが、20 年ぶりとなる商店をオープンしました。そして昨年、その隣にコツコツと DIY をして宿をオープンしました。また、島の中からだけではなかなか島や村を良くできないと考え、1 期ですが三島村の議員を務めました。2 期目は見事に落選してしまいましたが(笑)ただ、村にとっての議会という存在を少しは変えられたんじゃないかなと思っています。

そんな私が住んでいる竹島ですが、竹島、硫黄島、黒島の 3 つの島から成る三島村という村に所属しています。交通手段は週 4 便のフェリーのみです。役場が鹿児島市内にあり、現地にないという珍しい自治体でもあります。警察とか病院とか、普通だったらあって当たり前なのがほとんどない島でもあります。何もなさすぎて、店ができる前まで自動販売機が 1 台だけあったのですが、Google マップに自動販売機がのるくらい何もない島でした(笑)

竹島は、竹の島

何があるかといえば、島の 8 割を覆っているリュウキュウチクという竹です。竹島という、その名前の通りなんです。かつて竹島の暮らしというのは竹とともにあり、建材として竹を出荷していたり、家の屋根や壁、柵なども竹で作られていました。今でもタケノコ採りや魚釣りで使われるケゴというカゴ、こういった日用品も竹で作られていました。

そして、タケノコ。大名筍という島の代名詞とも言える特産品です。竹島で行なっている NPO の活動は主に 3 つ。まず、タケノコの商品開発や販路開拓・販売。

次に、ECOFF という NPO 法人が主催している村おこしボランティアの受け入れもしています。10 日間ほど村おこしに興味ある若者が一緒に島で活動するというようなボランティアです。

最後は学校。竹島の学校外は小 1 から中 3 までで 9 人いるのですが、9 人の子供たちに対して 11 人先生がいるという贅沢な学校です。そんな学校と「ハマギプロジェクト」という島の資源を活かしたプロジェクトも行っています。



美味しいけれど課題だらけ

今回は NPO で行っている大名筍の活動について詳しくお伝えします。まず、タケノコはめっちゃ美味しいです。特徴は、アクが少なく、タケノコ本来の甘さと食感があり、煮る・焼く・揚げるなど様々な調理法でも美味しく食べられること。「大名様が愛した」という美味しさが由来になるほどです。

竹島のタケノコの産業の中心は水煮缶でした。業務用の大きな缶に水煮を作っていくのが産業の中心だったんですが、僕が 11 年前に島に帰ってきて思ったのは、「タケノコ採り、辛い」。辛かったんですが、創業当時。40 年以上前、当時は年間 80 トンほど採っていたタ

ケノコが、人口減少と共に年々減少し、僕がいた当方で年間 10 トンほどで、今年度は約 1 トンほどしか取れていません。かつては夫婦で 1 日 2 トン取ったりとか、月 70 ～ 80 万稼いだという、すごく貴重な収入源だったみたいです。収穫量が減ってもほぼ同じ運営体制だったので赤字運営、低賃金、工場の老朽化などいろんな問題点がありました。大名筍の強みを活かせてない商品だったんです。

そして正直、タケノコの時期が来るのが辛い。タケノコ採りはかなりの重労働ですが、私が帰った年は特に不作で、頑張っても 1 日 3,000 円とか、ベテランの方でも 5,000 円くらい。でもタケノコのことをしにいかないと、「あいつなんで出てこないんだ」みたいな雰囲気がある島にあって行かざるをえないみたいな。「島の資源、誇り」というよりは、どちらかというと負担になっているような状態でした。せっかく島に帰ってから、「島にとって何かをしたい、元気にしたい」と思いつつ、当時は何でも経験や知識もなくて、本当に何をしたいかわからない状態でした。

大名筍の可能性

そんな中、竹島で出会った人が「このタケノコはすごく価値があるから、ちゃんとブランディングしたら産業になるよ。やるなら協力するよ」と言ってくれました。そこから僕の挑戦が始まりました。

まずは毎日、情報発信を続けました。リアルな情報を伝えたかったのですが、ちょっとリアルに書き過ぎてガチの炎上をしたこともあったんですけども(笑)それから販路開拓や、都市部での PR イベントなどあちこち動き回りました。東京や鹿児島市など島より人の多いところに住んでた時よりも、島に帰ってからのほうがたくさんの人との出会いや繋がりができて、志を共感し合える仲間とも出会えました。「自分が動くことが大事だな」というのをすごく感じました。

そんな中、水煮の加工に関しても利益率の良い商品に絞ることで組合が黒字化したり、賃金も収穫の金額を倍にできたりしました。NPO では筍の青果を取り扱ってたんですが、取扱量も少しずつ増えています。



ただ、島の中では衝突もありまして、僕個人はタケノコの事業で収入を得てる訳ではないんですが、「あいつだけ儲けてる」とか。組合にお金を払ってそこからタケノコを買い取って販売しているんですが、収穫や箱詰めを NPO のためにやってあげてる感じが当時はすごく強くて、時には自分だけで収穫して箱詰めしてってこともありました。続けてるうちにだんだん理解をしてもらって、今はそういうことはなくなってきました。

試行錯誤の商品開発

賢太さんともタケノコを通して関わりができて、数年前には竹島の中心人物と役場の関係職員、そういった人たちを集めて、タケノコのことやタケノコを通した島の未来について話す場を賢太さんと一緒に作りました。そこでいろんな話ができて、その後、水煮缶の製造が終わることを見据えて商品開発を始めていきました。水煮缶とは違う大名筍の良さを活かした水煮パックの開発ですが、これも難航しました。タケノコは保存が難しい食材で、保存量が多いと塩辛くなって下処理が大変だし、少なくすると保存がきかない。その調整をして「良いのができた」と思ったから ... 数カ月保存したらドロドロに溶けてしまった。2 年ぐらいかけてきたのが、ストップしてしまうということもありました。

そんな時に、国産メンマの関係者の方から連絡いただきました。メンマだったらできるかということで淡路島に勉強に行き、塩漬けてメンマにする基本を学んで早速試してみました。この製法自体は大名筍には合わなかったんですが、試作する過程でいろんなヒントを得て、結果的に大名筍の良さを生かした水煮パックができました。



これが今年の 5 月、6 月以降に販売をしていく予定の商品のうちの一つなんですけども、あと 2 つの新しい商品がこちらです。「NPO 法人みしまですよ」の「みしまの筍ですよ!」です。これは人気ラーメン店のそば屋のオーナー小池さんにレシピ開発をお願いしました。コンセプトメイキングを賢太さんたちにお願ひしました。もともと廃棄してしまっていた部分を活用して、タケノコの歯ごたえがしっかりしてすごく美味しい商品ですし、とてもいい商品となっています。ぜひ食べていただければと思います。以上が大名筍の今までの取組になります。



同じ志を持つ仲間とのつながり

挑戦するにあたって自分が壁だなと感じたのは、島の中に同じような目線や目的を持って一緒に取り組める仲間がいないということ。きついなと感じる。ただ、自分が挑戦をやめしまうと、島には人口 50 人しかいないので、「辞めることが島の未来に直結しているんじゃないか」責任も感じてしまう。それでも諦めずにやってこれたのは、島の外の仲間つながりがあったからです。その中でも賢太さんの出会いは大きく、島の課題を本当に自分ごとで捉えている人はなかなかいないので。自分ごととして一緒に考えてくれて動いてくれるというのは本当に力になっています。

そうして同じ離島で頑張る仲間たちとの繋がりもできて刺激をもらって、「よし頑張らなきゃ」と元気をもらっています。今回紹介した内容が全てリトラボの事業というわけではないんですが、このリトラボの事業に関わらせてもらったことで、たくさんの仲間たちに出会えたことが本当に自分の財産になっていると思っています。そして自分自身も誰かの助けになるような存在になれるといいなと思っています。

椿の風景を守り育てる

株式会社いおう / 棚次 紫寿代さん



暮らしに関与する責任を持つ

私は広島市出身で、地元の美術系大学を卒業後、夫と一緒に横浜で美術作家として活動しながら資金を貯めて2012年ドイツへ行きました。そこで約5年間住んで、帰国後に硫黄島へ移住しました。

2011年に東日本大震災が起こって、日本社会が大きく揺れている中でした。日本人ということで、いろんな人から原発のことなどについて意見を聞かれるんですね。もちろん意見はあるし、でもそれに対して自分がどうしたいかぼんやりとしている。そんな状態でした。



一方ドイツでは、社会的な課題に対して市民が自由に議論し、時には運動を起こして、とにかく考えてアクションしようという風土が根付いています。暮らしの中に自分が関与して責任を持てる事柄を、ちゃんと残しておくこと、その選択肢があること。もちろん思想が暴走するようなネガティブな面もありますが、それが本当にカルチャーショックでした。

これまで自分が属する社会に対して何もアクションせずに生きてきてしまったという気持ちと、また異邦人としてドイツ社会に本当の意味で関わるには程遠く、自分はよそ者で旅人でしかないという気持ちを抱え始めていました。夫の方がそういった問題意識に対してより深刻で、ドイツ移住後かなり早い段階で人格が変わるくらい深い悩みに追い詰められていたように思います。

硫黄島への移住

そんな中、妊娠していることが分かって2016年に帰国しました。帰国後、地元近辺で暮らすことを私はイメージしていたのですが、夫が「硫黄島で地域おこし協力隊をやりたい」って言ってきたんです。子供も生まれるし、さすがに「離島はちょっと」って思ったんですが、「自分の能力はここでしか生かせないと思う。変に就職してしまうんじゃないくて、ここに行きたい」という夫の意志が固くて、2017年に夫が硫黄島に赴任しました。私もその1年後に生後半年の娘と一緒に移住しました。

協力隊で各地に出張で飛び回る夫の話から、鹿児島にはたくさん面白い取り組みがあって、魅力的な人たちがいると。リトラボの島のフィールドワークがあったり、山下賢太さんが島までアイランドカンパニーの取り組みのお話をしに来てくれたこともありました。

そういうのを聞いて、だんだん羨ましくなり、私も何かしたいと思って観光案内所でパートとして働き始めました。週に2回、順繰りに島内の史跡を掃除して回るんですが、自分が知る自然とは全然違うスピードで、雑草や竹があつという間に生えてくるんですね。夏は刈っても刈っても、振り向いたらもう生えてくるんじゃないかっていうぐらい。台風が来たら全部めちゃくちやになるし、とにかく自然が優しくないっていつも思っていました。

ピカピカの椿山

でも、そういう過酷な環境下にあっても、常にピカピカに手入れされている場所が島の中に何力所かあることに気づくんですね。どうやらそれは島の人々が管理している椿山らしい。でも管理するのは後期高齢者がほとんどで、さらにその半分以上が80歳を超えている。それを聞いた時に、「ああ、この景色はあと10年もたないかもしれないんだ」ってすぐ理解しました。椿山を持っているお年寄り一人一人に椿の仕事をやりたいと相談して回ったら、「やってみなさい。椿



は大変だけど、すごく楽しいよ」と全員が背中を押してくれました。

こうして2020年の春に観光案内所をやめて、硫黄島の集落支援員になり椿に関わる仕事を始めました。間もなく100歳を迎えようとするおばあちゃんの山がすごくピカピカで、絨毯みたいにふかふかの苔に覆われていて。冬は苔の緑と椿の赤い花で、すごく幻想的な景色が広がるんですね。なんでそこまで綺麗にするかというと、秋に椿の実を収穫してそれを絞って油にして島の特産品にするのですが、年を重ねるとだんだん目が悪くなって地面に葉っぱや草があると落ちた実がよく見えないのだと。それを拾いやすくするために手押し車を押して、年がら年中山に通って落ち葉掃きや雑草取りをするんですね。



最初の頃は、とにかくいろんな話が聞きたいと思って、しょっちゅう山にお邪魔してました。こんな風に地面に座っているおばあちゃんに話を聞くと、こういう言葉が返ってくるんですね。「焦ってやっても良いことないよ。やらんといけんって思っとったら、でせん」って。「こうやって草をむしりながら、綺麗にしながら、振り返ったら今日もいい仕事したなって思う心がないとでせん。これだけやったからって何かになるわけじゃないんだけど、何年後かに『ばあちゃんがいい椿を育ててくれてよかったね』ってなったらいいじゃない。ばあちゃんももう時間がないって思いながら、何かになるわけじゃないけど、やるの。」って言うんですね。自分が100歳を目前にした時にそんな心で日々を生きられるんだろうか、そんな風に生きていたいなと、純粋に胸を打たれました。

おわりに

島という存在は、世界が有限であったことをわたしたちに思い出させてくれる。海に囲まれた小さな世界に生きていると、人は、ひとりでは生きていけないという当たり前のことを身体性をもって実感する。際限なく拡がり続けるものは、島という環境には殆どないのだけれど、この有限であるということが、エコシステムの土台にあるものではないかと考える。

限られた土地の上で生きるには、そこに生きるもの同士が、互いの存在を認め、限りある資源を生かしあって出番と役割をつくりながら生きるほかにないのだ。長い時間をかけて地球が作り上げた自然という環境は、一朝一夕ではつくることが出来ない。わたしたちは、月と太陽のリズムの中で祈り、唄を歌い、輪になって踊り、時には慰め合いながら島の「あきらめ」を共感して笑い合う。そうした、生活文化を礎に産業を起こしていこうとする豊かな島の姿が見えてきた。

あきらめという言葉は、本来は「あきらかにする」という仏教用語が語源である。また、「諦」は真理や道理の意味があり「あきらかに真実を観る」ということである。自然のエコシステムを理解しようとせず、その真理を知ることはできるだろうか。

人口が過密する都市部では、特に経済合理性が優先される中で、人為的につくられた人間のためのシステムに合わせて人間が生きていく。都市部では本物の自然をみることが出来ないどころか、土に触れることも目にする機会も無くなってきた。自然というものを人間社会のコントロール下におくことで、経済優先の社会を創り上げてきた。その結果、拡張する欲求のマインドが経済合理性と引き換えに人と人、人と自然を遠ざけることで、自然の一部であることを忘れた人間本位の幻想をつくる。生産性の向上も効率化もSDGsも持続可能な社会をといった呼びかけのどれもが、人類の肥大化によるもの。

人間とは、間を理解し間と向き合うことで、人間たらしめる生き物だと思う。しかしながら昨今は、その間を取り除くことで、関係性をさらに希薄にさせ、歪みをつくり、課題そのものをビジネス化することでより深刻化させている側面があるようにもみえる。これからの社会を考える時に、経済性と社会性の両立は不可欠であると思うものの、それらを繋ぐ間をいかに扱うかが大切である。

それは、人とひと、人と自然。経済性と社会性の関係性を繋ぎなおす原点回帰に繋がる。あらゆる分断された社会を、今一度接続し直す。南北 600 キロに点在する鹿児島島の島々にある無数の物語。鹿児島離島文化経済圏という存在は、島と島を隔てるものではなく繋いでいるものだ。経済成長の上に環境や文化、コミュニティがあるのではなく、その土地固有の環境や文化、コミュニティの上に経済がある。

それをもう一度取り戻す旅が、ここから始まる。
さあ、新たな島へ向けて。出航せよ。



island company.

